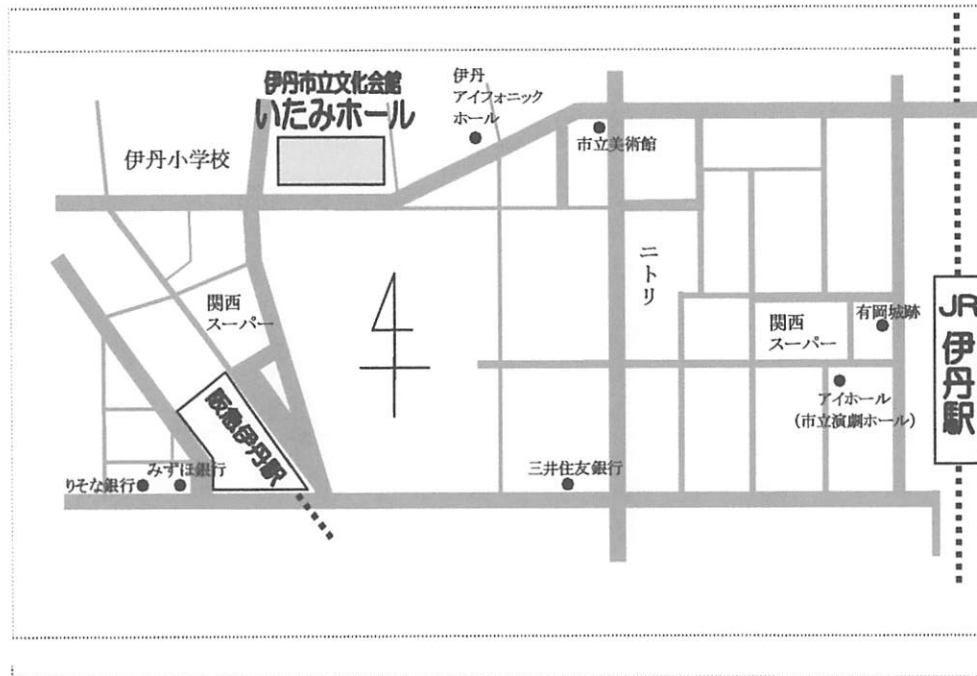


第171回

ホームコンサート



いたみホール 兵庫県伊丹市宮ノ前1丁目1番3号

TEL : 072-778-8788

阪急神戸線 伊丹駅より北へ徒歩約6分

JR宝塚線 伊丹駅より西へ徒歩約12分

次回「第172回ホームコンサート」予告

と き 2024年2月12日(月/祝) 午後2時開演

ところ 伊丹市立文化会館「いたみホール」

(B1F 多目的ホール)

2023年11月10日(金)

開場:午後6時 開演:午後6時30分

伊丹市立文化会館「いたみホール」

(B1F 多目的ホール)

1. クラリネット付きソプラノ独唱

ソプラノ 山口 芳子

クラリネット 井上 かおり

ピアノ 上田 啓子

R.シューマン(1810～1856)

『女の愛と生涯 Op.42』より

「彼に会って以来」

「彼は誰よりも素晴らしい人」

女の愛と生涯

F.ラハナー(1803～1890)

故郷の歌 Op.117

J.W.カリヴオダ(1801～1866)

『女の愛と生涯』は1830年にシャミッソー(1781～1838)が発表した9篇からなる抒情詩で、最後の9編目は年老いた女性が花嫁となる孫娘に人生について語る“かけがいのない日々の夢”、1～8編はその思い出を語っているとも受け取れる。

シューマンはその1～8編を、ピアノと歌とが対等な立場で音楽表現する8曲の連作歌曲として作曲し、1840年に発表した。ラハナーはシューマンより7歳年上、シューベルトの友人としても知られる。彼の「女の愛と生涯」は1編目の詩にクラリネットとピアノを使って淡い恋心が高揚する様を描く。カリヴオダはボヘミア出身の作曲家。ヴァイオリニストとしてプラハ歌劇場管弦楽団で活躍の後、亡くなる前年まで宮廷楽長を務めた。「故郷の歌」は“誠実なる静かで平和な谷よ～こんな故郷は他にはないよ”と歌う。

2. ピアノ独奏

森木 裕子

『幻想小曲集 Op.12』より

R.シューマン(1810～1856)

「なぜに」

「気まぐれ」

「夜に」

1837年に作曲された『幻想小曲集』は文学的な標題が付けられた8曲からなり、幻想的な情緒に満ちている。

「なぜに」冒頭に現れる音型の繰り返しが“なぜ？”と言っているようで、恋人クララとの甘い会話のようでもあり、結婚を許してくれないクララの父との確執からの悩みが反映されているようでもある。「気まぐれ」スケルツォ的な作品で、調やリズムがコロコロ変わる様子に“気まぐれ”が感じられる。タイトル「Grillen」はグリルでの焼肉！おそらくお肉を何度もひっくり返して焼く様子からのイメージかと。シューマンのユーモアかも。「夜に」うねり波打つようなアルペジオの中に断片的なメロディが現れ強い緊急感を生み出す。嵐のようなあるいは狂気を孕んだ強い想いが感じられる。シューマンがイメージしたのは、灯台の下で毎晩、松明を持って待つ恋人のところに男が海を泳いで会いに行くという物語の中のシーン。クララへの激しい愛の想いが吐露されている。

3. ピアノ独奏

近藤 文

ノクターン第15番 ヘ短調 Op.55-1

F.ショパン(1810～1849)

『クープランの墓』より

M.ラヴェル(1875～1937)

「メヌエット」

「リゴドン」

「ノクターン第15番」ノクターンは、日本語で夜想曲と訳されるが、“夜に想う”という字のごとく、夜の静かな時間に自分の心を見つめているような曲想。逡巡を繰り返した先に光が見える。

『クープランの墓』はクープラン(1668～1733)を代表とする18世紀フランス音楽に敬意を表して作曲された全6曲からなる組曲。第一次世界大戦(1914～1918)で戦死した友人6人に捧げられている。優雅で簡潔な18世紀の古典舞曲の様式と、ラヴェルの緻密で繊細な音が融合した作品。「メヌエット」クープランが仕えたルイ14世(1638～1715)は、宮廷舞踊に初めてメヌエットを取り入れ、自身も踊ったと言われている。「リゴドン」17世紀南フランス・プロヴァンス地方発祥の2拍子の舞曲。

～ 休憩 ～

4. クラリネット独奏

クラリネット 井上 かおり

ピアノ 上田 啓子

クラリネット協奏曲 イ長調 K622

W.A.モーツァルト(1756～1791)

第1楽章 アレグロ

第2楽章 アダージョ

第3楽章 ロンド(アレグロ)

モーツァルトが最後に作曲した協奏曲で、唯一のクラリネット協奏曲である。作品目録への書き込み時期から推量すると、この曲を作曲していた1791年当時、彼は既に体調を崩していたかもしれない。友人でフリーメイソンでもあったアントン・シュタードラー(1753～1812)のために作曲されたが、自筆譜は見つかっておらず、初演も不明。「ウィーンで最初のクラリネット名演奏家」と呼ばれていたシュタードラーは普通のクラリネットよりもさらに3度低い音まで出せる特注楽器(バセットクラリネット)を使用しており、この曲もその楽器の為に作曲された。したがって普通のクラリネットで演奏する場合は出せない音域があるが、本日は出来るだけ本来の音域を活かしたアレンジで演奏する。

5. ピアノ独奏

小林 玲子

ピアノソナタ第30番 ホ長調 Op.109

L.v.ベートーヴェン(1770～1827)

ベートーヴェンの最晩年に書かれた3曲のピアノソナタの最初の作品で1820年にミサ・ソレムニスの作曲と並行して着手された。前作の第29番「ハンマークラヴィア」とは対照的に、叙情的で安らぎと温かさに満ちている。

第1、第2楽章は自由なソナタ形式で幻想曲風に切れ目なくつながり、作品の中心となる第3楽章は変奏曲となっている。運命との戦いを越えて、さらなる精神の高みを目指すような後期の様式が静けさの中で展開される。パッサのゴルトベルク変奏曲との類似も指摘され興味深い。